

2026年  
6月12日号

一冊目

塗 仏 の 宴

作者：京極 夏彦

▼ボリニームありすぎ読破は根性！人の心理の深層を妖怪で解説☆  
『このミステリーがすごい』2024年で2位に「鶴の碑」がランクインしたので、久しぶりに京極作品にトライ。「百鬼夜行シリーズ」として続いているので、頑張つてそこまでの作品も読んでいきます。漫画バージョンが出ていた、「姑獲鳥の夏」「狂骨の夢」「鉄鼠の檻」はスイスイ読破。そして、「塗仏の宴」に出会います。

漫画バージョンは無し。ま、読みましようかと、Amazonで注文。届いた時にびっくり。「分厚！重！辞書やん!!しかも上下巻…」上巻九百ページ下巻千百ページ。合計二千ページ…。

言いたいことはただ一つ。6巻くらいに分けて。で、何とか2ヶ月くらい掛けて読破しました。テーマは、「人間はどのように物事を認識しているか」ここがひたすら描かれます。

歴史は、その時代やその後の時代の人の認識を通じて今に伝わっています。だから分裂したり融合したりして、変化したり消えてしまったりするので。河童や、おとろし（ほとんど誰も知らない妖怪）を例に説明がなされていきます。その人が持つ歴史も、その人の認識のもと形作られ、その人の人格を形成しています。それを揺るがされたらどうなるのか。こんな深すぎるテーマを描くなら、確かにこのくらいのボリニームは必要なのでしょう。エンタメ付きの經典みたいでした。内容はめっちゃ面白かった。読んだことある人に出会わないので気持ちは共有できません。寂しい。でも決してオススメできない（時間を奪いすぎるので）。次作は千百ページ…長いって…もう慣れたけど。精神と時の部屋が欲しい。



二冊目

黒 牢 城

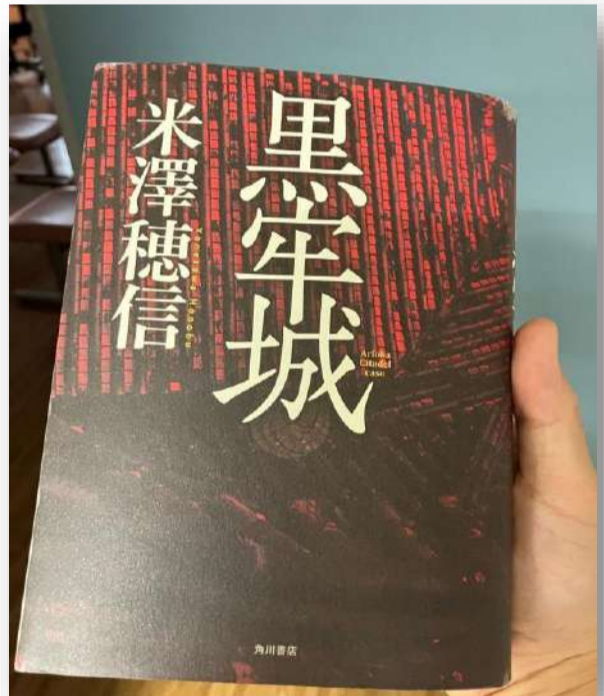
作者：米澤 穂信

▼有岡城を舞台にした

牢の中の黒田官兵衛が解き明かす

歴史ミステリー

知略に優れ、武勇に秀でた荒木村重村重を凌ぐ知略を持つ黒田官兵衛伊丹 有岡城を舞台としたミステリー。儂い羊たちの祝宴でも魅了された米澤穂信さんの世界観。本作でも見事に引き込まれました。本人は登場しないのに、最後に1番かっこいいところを持ついく両兵衛のもう1人。語られるのは分かってたんです。分かってたんですけど、鳥肌です。



2026年度に映画化された人気の1冊

三冊目

天 を 測 る

作者：今野 敏

▼理屈でものを考え世の中をつくっていく

小野友五郎の物語

幕末、明治維新といえは維新志士が主役になりがちですが、本作の視点は「幕臣」です。二百年以上続いた徳川幕府という秩序を絶対的なものと信じ、開国とともに激しく動き出した日本をよき社会として維持しようと奔走します。

有能で誠実で、この人と、その周囲の仲間任せでおけば日本は大丈夫だと思わせてくれます。

だからこそ、維新志士たちのように変化に適応していく者たちが次の時代を形作っていく流れが切ないですね。

それでも、リーダーが変わっても、日本を支えてきた優秀な人たちは、新しい環境で力を発揮するのです。勇気ももらいました。

組織に忠実で優秀な右腕は、平時には何より心強いのです。しかし変化の激しい時代には、それだけでは足りない。

歴史小説なのに、読み終えたあとに考えさせられるのは、今をどう生きるかでした。

知られざる幕末英雄の物語！

